

明戸遺跡における昭和41年の試掘調査報告

大久保 学（十和田市教育委員会）

澤田 恭平（青森県埋蔵文化財調査センター）

はじめに

明戸遺跡は、十和田市の中心市街地から約10km南に位置し、奥入瀬川支流の後藤川と大沢と呼ばれている小河川に挟まれた舌状台地の緩斜面に位置する。本遺跡は、縄文時代前期から晩期の遺跡として知られており、これまで4度に渡り発掘調査が実施され、来年度も発掘調査が予定されており、今後の調査成果が期待される遺跡である。

また、大沢の対岸には、高屋遺跡が存在し、縄文時代前期・晩期の散布地として周知されている。平成20年度に実施された青森県埋蔵文化調査センターの発掘調査によって、縄文時代の竪穴住居跡が確認されている。

十和田市教育委員会では、平成19年度に県道戸来十和田線凍雪害防止工事に伴い発掘調査を実施し、平成20年度に整理・報告書作成事業を実施している（大久保2009）。その際、十和田市郷土館収蔵庫において、昭和41（1966）年に実施された試掘調査報告書が発見された。その試掘調査報告書を見ると、出土遺物の実測や写真が数点掲載されているが、未報告であったため、出土遺物の一部を再整理し報告することとした。また、残りの遺物については、今後別な機会に報告を行う予定である。

1. 発掘調査略歴

明戸遺跡はこれまで本発掘調査を4回、その他、試掘・確認調査を5回実施しており、概要是下記一覧のとおりである。

本遺跡は、これまでの発掘調査から縄文時代前期～後期の竪穴住居跡や晩期の墓坑等の遺構が検出されている。出土遺物をみると、縄文時代前期・晩期の遺物が非常に多く出土し、縄文時代前期に集落として使用され、断続的に渡って生活が営まれていたと思われる。

表1 明戸遺跡調査一覧

No.	調査期間	調査種別	調査原因	調査主体	調査面積	主な検出遺構	主な出土遺物
1	昭和41年4月20日～4月23日	試掘調査	開田に伴う新規遺跡発見	市	17m ²	不 明	縄文土器(晩期)
2	昭和57年6月1日～6月12日	確認調査	畑作物転換に伴う土地改良に伴う確認調査	市	132m ²	竪穴住居跡、フ拉斯コ状土坑	縄文土器(晩期)、石器
3	昭和58年5月25日～8月6日	本発掘調査	畑作物転換に伴う土地改良	市	450m ²	竪穴住居跡、墓坑	縄文土器(前期～晩期)、石器
4	平成17年4月15日	試掘調査	十和田滝沢IMT基地局建設事業	市	10m ²	(遺物包含層)	縄文土器片(前期)
5	平成18年5月29日～7月14日	本発掘調査	十和田滝沢IMT基地局建設事業	市	81m ²	竪穴住居跡、埋設土器	縄文土器(前期)、石器
6	平成18年10月11日	試掘調査	道路拡幅に伴う排水路の改修工事	市	20m ²	な し	縄文土器片(前期・晩期)
7	平成18年11月29日	試掘調査	集会所新築工事及びゲートボール場造成	市	10m ²	な し	なし
8	平成19年10月18日～11月26日	本発掘調査	県道戸来十和田線に伴う凍雪害防止事業	市	140m ²	竪穴住居跡、フ拉斯コ状土坑	縄文土器(前期・後期)、石器
9	平成20年8月5日～11月28日	本発掘調査	県道戸来十和田線に伴う凍雪害防止事業	県	1277m ²	大型竪穴住居跡、竪穴住居跡	縄文土器(前期～晩期)、抉状耳飾

2. 昭和41年試掘調査報告書の概要

昭和41年に実施された、試掘調査報告書の内容は以下のとおりである。

報告書名	青森県新産地域内十和田市に所在する遺跡調査報告書		
報告者	日本考古学協会員・青森県文化財専門員	音喜多 富寿	
調査員	新産地域埋蔵文化財調査員	市川 金丸	
	新産地域埋蔵文化財調査員	栗村 知弘	
	十和田市教育委員会社会教育課係長	安野 茂	
	十和田市文化財保護協会員	鈴木 十志雄	
	十和田市文化財保護協会員	鈴木 進	
発掘の主体	十和田市教育委員会		
	本遺跡は、昭和41年4月19日ブルドーザーによる開田作業中発見されたものであり、その大半が開墾される予定であったので、県教育委員会と十和田市教育委員会の要請により新産地域埋蔵文化財調査員市川金丸、栗村知弘、音喜多富寿の3名が次のとおり現地を調査した。		

記

調査期間	第1回調査年月日	昭和41年4月20日
	第2回	" 昭和41年4月21日
	第3回	" 昭和41年4月22日～23日

・第1号トレンチ

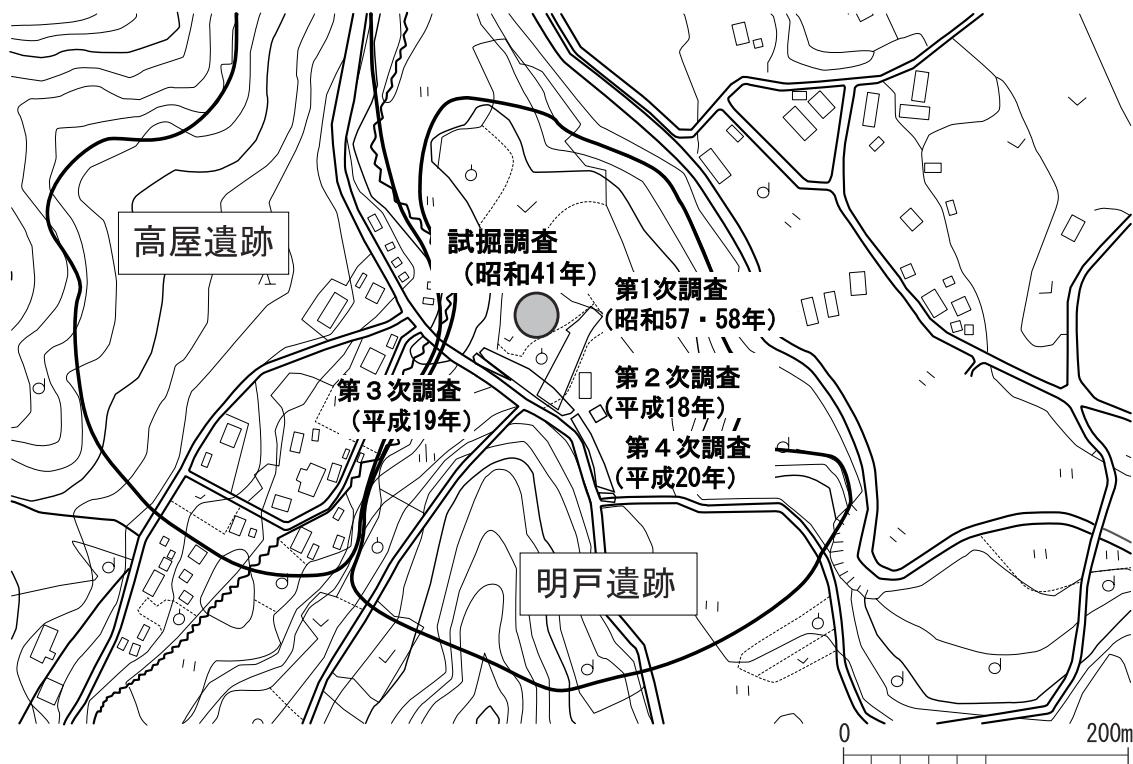
第1回調査は、開田工事予定地5ヘクタールのうち境界線付近の未だ工事に着手していない部分を試掘し、遺物の包含が認められたので幅1m、長さ7mの第1号トレンチを調査している。その結果、複元可能な縄文土器（晩期）が7個体、石器6点出土している。

・第2号トレンチ

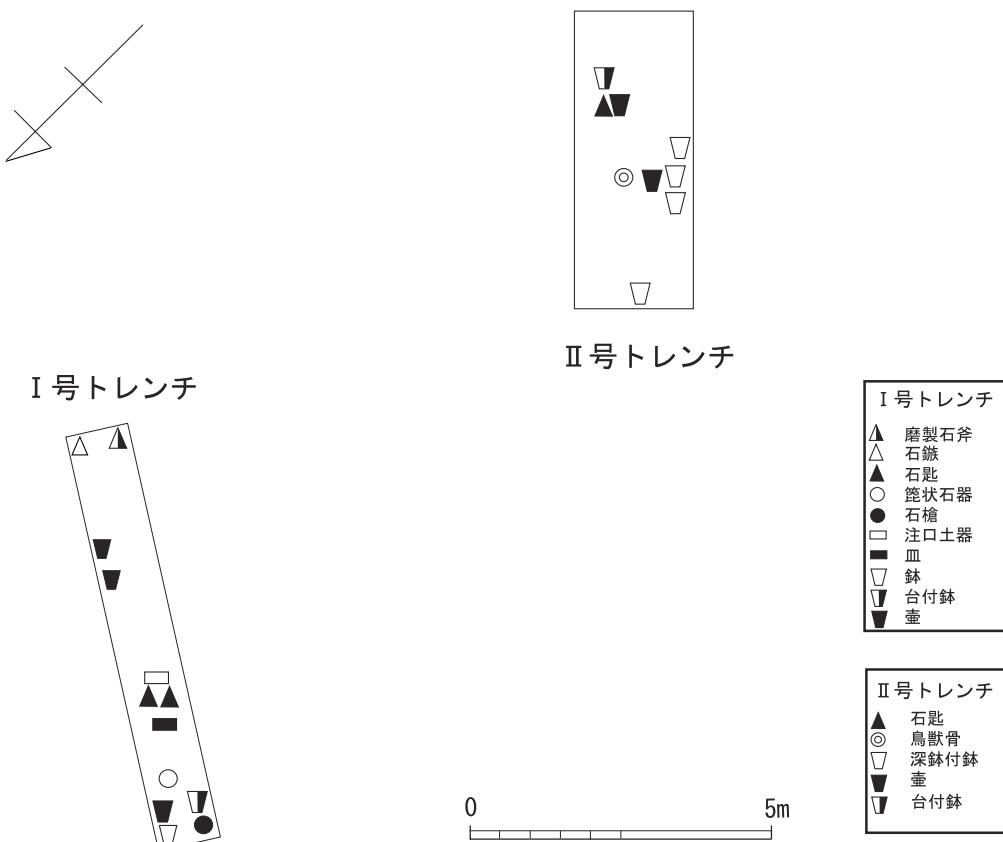
第2回調査は、開田工事予定地5ヘクタールの一部幅2m、長さ5mの第2号トレンチを調査している。その結果、複元可能な縄文土器（晩期）7個体、石匙2点、その他自然遺物として鳥獸骨5点出土している。

・第1号、第2号トレンチ以外より出土の土器、石器類

ブルドーザーによる開田作業中に発見されたもので複元可能な縄文土器は15個体あり、全てが縄文晩期であると思われる。石器は、上記の縄文土器同様に表土や開田作業中に発見され、石鏸や石匙等合計46点発見されている。



第1図 調査区位置図(1/5000)



第2図 トレンチ配置図及び出土遺物位置図(1/120)

4. 出土遺物について

今回は、調査報告書に掲載されていた実測図や写真、注記によって同定することができた土器15点を図示する。

今回図示した土器の器種は、深鉢、鉢（台付を含む）、浅鉢、皿、壺、注口である。ここではそれぞれの器種の概要を述べるにとどめる。器種や各部位名称、土器に描かれる文様などについては、弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告5『青森県十和田市明戸遺跡出土の亀ヶ岡式土器について』（藤沼ほか2007）を参照とされたい。

深 鉢（第3図）

全体形は口縁部が内湾し、平底となる縦長の逆台形を呈する。口縁部は平縁が主となるが、小波状の装飾が交互に施されるものもある、中には正面を示すようにB突起が3単位付くものもある。胴部は縄文地となり、施される原体は単節LRが斜位に施される。1には地文の一部に結節によって生じたと考えられる逆S字状の連續した圧痕がみられるものもある。深鉢の中には、3のように胴上部に2個1対の穿孔がみられるものがある。穿孔間には胴下部にまで至るひびが見られることから、破損した際の補修孔であると考えられる。

鉢（第4図）

全体形は、口縁部が内湾・または直立気味となる逆台形を呈する。それぞれ有文で台部を伴うもの、無文で台部を伴わないものである。5は口縁部から頸部にかけて刻み目列、沈線、正面を示すようないわゆるA突起が付く。胴・台部には、磨消部を持たず、沈線によって描かれた横S字状の配置文が描かれる。縄文地となり単節LRが斜位に施される。6は口縁部にいわゆるB突起が付き、やや幅広となる頸部無文帯を形成する。胴上部には2個1対となる突起が等間隔で配置され口沈線や刺突列がめぐる。胴部には条痕と考えられる縦位の地文が施される。

浅 鉢（第4図）

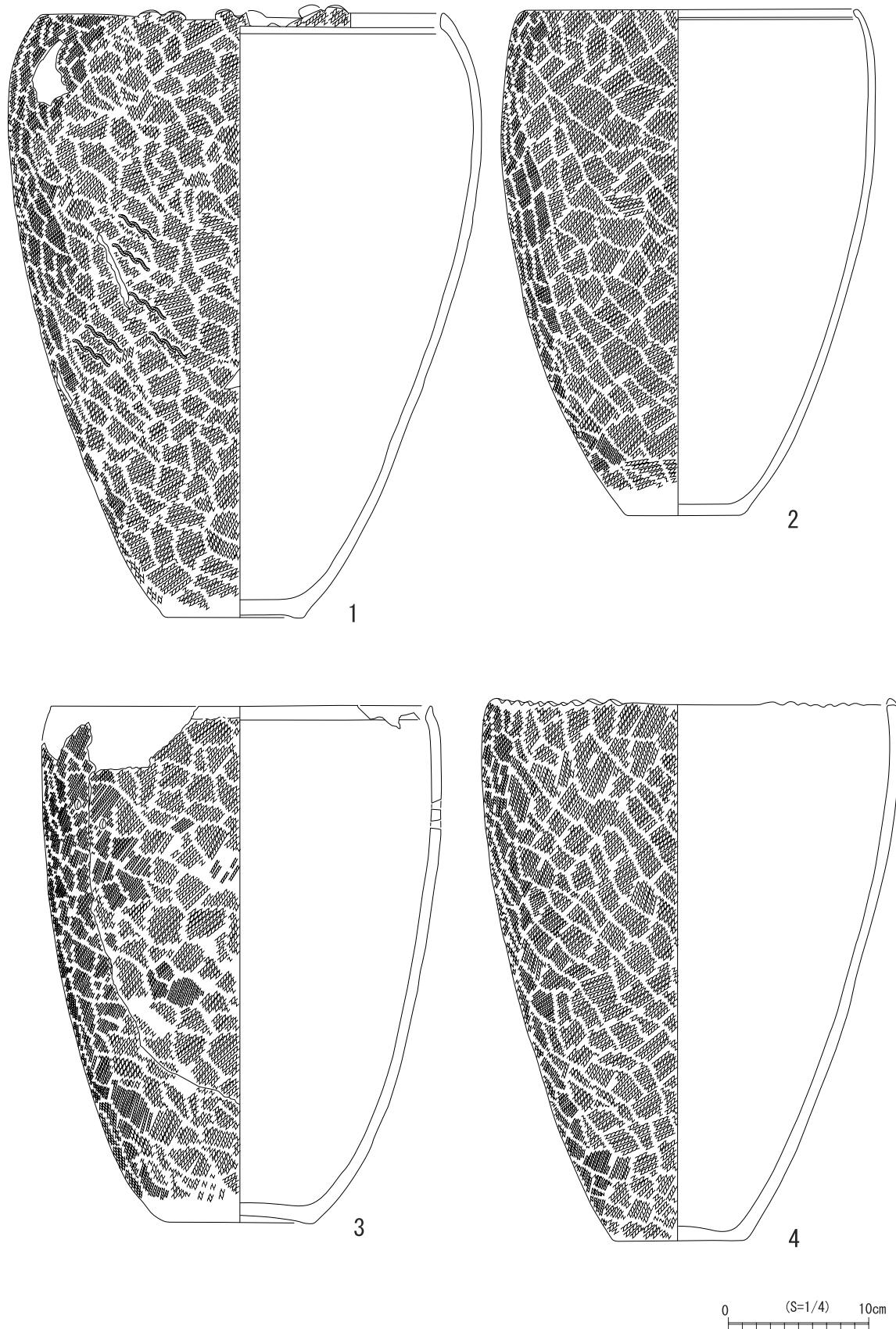
全体形は、7のように口縁部が屈曲せず外側に開き、丸底となる半球形を呈するものや、8のように口縁部が強く内湾し台形を呈するものがある。共に無地で装飾はなく、7は輪積痕が見られる。また、8の内面には赤色顔料が多量に付着しており、顔料を入れる器（パレット）として用いられた可能性が考えられる。この2点については、便宜上浅鉢として扱ったが、装飾や器形から縄文晩期におけるいわゆる浅鉢とは異なる特色を持つため、時期や用途など今後検討する必要がある。

皿（第4図）

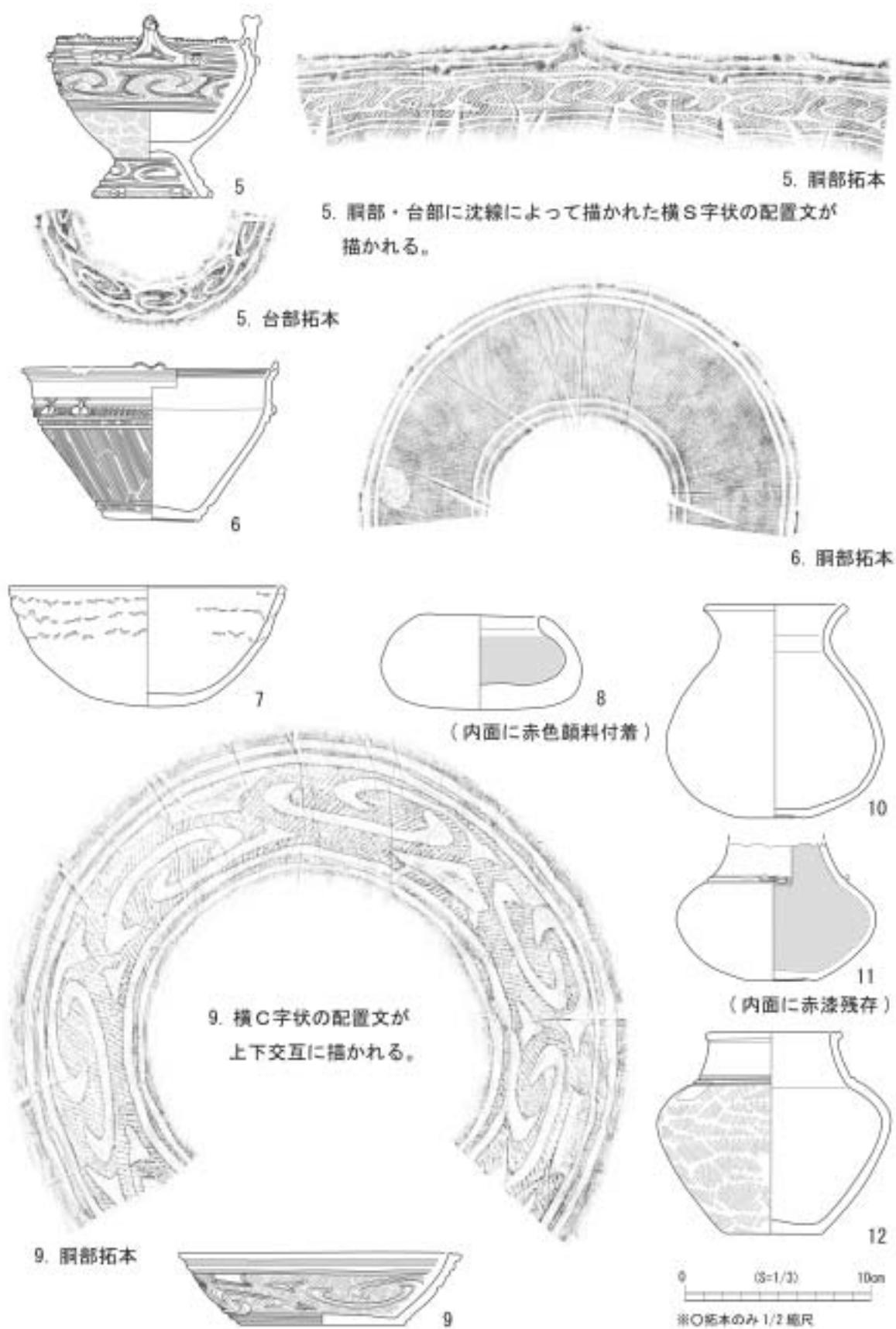
全体形は、口縁部が屈曲せず外側に開き、平底となる横長の逆台形を呈する。平縁で、口唇・口縁・底部に沈線がめぐる。有文で、胴部には横C字状の配置文、台形・三叉状の充填文が描かれる。縄文地となり単節LRが斜位に施される。

壺（第4・5図）

壺は、器形にバリエーションがあり、口縁部から頸部は、外傾するもの、直立気味に立ち上がるものの、内側にすぼまり、逆ハの字状となるものが見られる。胴部は、肩が張るもの、球形となるもの、横長の橢円形となるもの、下膨れとなるものがある。頸部には主に沈線や隆帶がめぐり、中には正面を示すようにB突起が1単位付けられる。有文のものは13の1点で、沈線と刺突列によって縦方向に区画された文様帶に逆S字状の配置文が描かれる。無地のものが主となるが、中には12のように単節



第3図 明戸遺跡出土土器（1）



第4図 明戸遺跡出土土器（2）



13. 汗線と刻突列によって縁に区画された文様帶にS字状の配置文が描かれる。



13. 脇部拓本

14
(側面)



(正面)

14. 拓本



14. 横C字状のモチーフによる配置文が描かれる。



(底面)

注口部

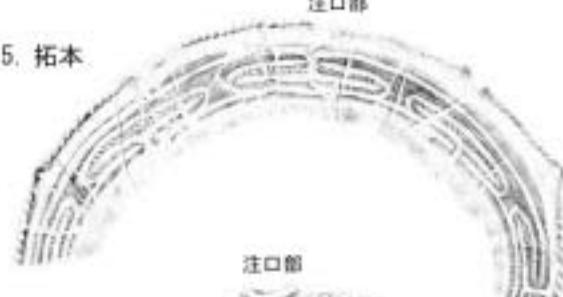
(上面)

15



(正面)

15. 拓本



注口部

(上面)



(側面)



0 (S=1/3) 10cm

第5図 明戸遺跡出土土器（3）

L R・R Lが斜位に施され、羽状縄文となるものもある。11の内面には、赤漆が多量に残存しており容器として用いられたと考えられる。

注 口（第5図）

全体形は、胴部が算盤珠状となり、口縁部が直立気味となるもの、外傾するものが見られる。14は彫り込みやB突起、刺突列によって肉彫的な装飾が施される。文様は、胴上部には磨消部を持つ四角状の配置文が描かれ、胴下部には下線を持たない連續した文様が描かれる。15は刻目列や2個1対の突起によって装飾される。文様は、胴部の上下共に工字文が描かれる。地文は縄文地となり、単節L RまたはR Lが斜位に施される。

表2 出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)				特徴	地文	炭化物	赤彩	注記
		器高	最大径	口径	底径					
1	深鉢	42.9	23.9	28.7	20.3	完形。口縁部にB突起が3単位	単節LR(一部結節)	有	無	66.11.明戸
2	深鉢	36.5	28.5	27.8	10.5	完形。口縁部内面やや肥厚。	単節LR(一部結節)	有	無	66.4 明戸
3	深鉢	35.9	26.8	24.2	8.2	口縁部一部破損。胴上部に2個1対の補修孔あり。	単節LR	有	無	66.11.14 D-1
4	深鉢	38.7	29.9	28.4	9.4	完形。口縁部が小波状と平縁交互にめぐる。	単節LR	有	無	66.11.明戸20
5	鉢	19.0	11.6	10.2	6.3	完形。台付。有文。	単節LR	有	無	66.4.20.明戸 T2
6	鉢	8.4	14.0	13.7	5.2	完形。	条痕文?	有	無	66.4.20.明戸
7	浅鉢	6.6	15.0	15.0	4.0	完形。無地。輪積み痕あり。	無	無	無	66.4.19 明戸
8	浅鉢?	5.2	11.0	6.6	6.1	完形。内面に赤色顔料入り。パレット?	無	無	有	66.明.2トレ
9	皿	4.0	15.4	15.2	9.0	完形。有文	単節LR	無	有	66.4.明戸
10	壺	11.8	11.8	7.4	2.9	完形。	無	無	無	66.明戸 T2
11	壺	(7.7)	10.9	—	3.6	口縁～頸部破損。内面に赤漆残存。	無	無	有	66.4.20.明戸
12	壺	11.1	12.7	7.3	5.2	完形。	単節LR・RL(羽状)	無	無	未注記
13	壺	11.0	12.3	5.7	<3.0>	胴下部～底部の一部破損。有文	無	無	有	66.11.明戸
14	注口	8.0	15.7	10.7	1.5	完形。有文	単節LR	無	無	66.4.明戸 T1.
15	注口	(9.1)	14.5	8.2	—	底部欠損。有文(工字文)	単節RL	無	無	66 明戸

()は残存値。 < >は推定値。

おわりに

今回の報告は、昭和41年の明戸遺跡試掘調査出土遺物の資料紹介である。出土土器のほとんどは、縄文時代晩期中葉大洞C1式～C2式が主体であった。本遺跡晩期の出土遺物については、昭和57・58(1982・83)年に約300個体出土しており、その際出土した遺物と比較しても、今回図示した土器と概ね同時期のものと考えることができる。

当遺跡周辺において、調査面積の大きい発掘調査はないが、これまでの試掘調査や確認調査の成果を加えることによって少しずつではあるが、明戸遺跡における当時の居住形態や生活を復元することが可能になっていくものと思われる。

<参考文献>

- 福田友之ほか (1988) 『明戸遺跡発掘調査概報』 十和田市教育委員会
- 誉田 実・福田友之ほか (1989) 『明戸遺跡発掘調査報告書』 十和田市教育委員会
- 大久保学・松山 力 (2007) 『明戸遺跡II』 十和田市教育委員会
- 藤沼邦彦ほか (2007) 『亀ヶ岡文化実測図集(3)』 弘前大学人文学部日本考古学研究室
- 青森県公立発掘調査機関連絡協議会ほか (2009) 『平成20年度青森県埋蔵文化財発掘調査報告会資料』 青森県公立発掘調査機関連絡協議会
- 大久保学・島口 天 (2009) 『明戸遺跡III』 十和田市教育委員会